

同志社大学音楽部活動からプロの声楽家への道程

— 太田黒養二に焦点を当てて (一) —

仲 万 美 子

はじめに

同志社大学は音楽学部が設置されていたわけではないが、明治時代からすでに音楽活動が盛んであった。筆者が、現在も同志社大学の学生が音楽に大いに関心を持ち、聴取するだけでなく積極的に演奏することに喜びを感じているのを実感したのは、以下のような講義の場であった。

筆者は二〇〇四年から学芸学部音楽学科に専任として着任した後、当時同志社大学全学部に開講されていた「音楽概論」を三年兼任したが、早朝の講義にも拘らず、一年次から四年次まで多くの受講生と出会うこととなった。音楽を専門に研究をしない若者に、世界の多様な音楽と人間が出会い、また人間が生み出す音楽の「力」について語り、同時に多様な関心をもつ学生達が毎回の提出物を通して、私に語りかけてくれる言葉に大いに刺激を受けた。そしてその受講生の中には受け身として音楽を視聴するだけでなく、同志社交響楽団、同志社混声合唱団、同志社大学マンドリンクラブ、軽音など、クラブやサークルで自ら音楽と対峙し演唱・演奏する喜びの体

験者も多く含まれていた。そしてさらにアマチュアのコンクールで賞を獲得したり、また卒業後音楽大学に進学しプロの音楽の世界に羽ばたいた学生とも出会うことができたのである。

さらに同志社女子大学の音楽専攻科の講義「京都の音・音楽」を担当するなかで、京都は、新しい音楽と出会い、新しいまなびが展開し、音楽愛好家の各種団体、同時に京都大学、同志社大学の音楽系クラブの活動、更に国内外の著名な演奏家たちが来京し演奏会が開催されていたことを再認識することとなった。同志社女子大学の栄光館などもその会場としても大きな役割を担っていた。(京都音楽協会、一九四二年、仲 二〇一二年)。

このように「京都」は、伝統芸術文化を育んできた文化の都であると同時に、明治・大正・昭和という新時代に、外地旧満洲地域ともつながり、さらにはシベリア鉄道の先にある欧州の音楽都市へ、また欧米の航路で欧州・アメリカともつながり、そこに往來する多くの芸術家によって西洋音楽文化の隆盛をみたという巨大な音楽空間が筆者の眼下に浮かびあがってきた(仲 二〇一九年)。

本稿で取り上げる太田黒養二という人物は、同志社大学マンドリンクラブ、男声合唱団プリムローズなどに所属し活動していたのでクラブ関係の論述には登場していた(石川 一九三〇年、山形 一九五四年、赤井 二〇一〇年)。しかし、プロの音楽家の世界に足を踏み入れ、パリにまなび、その成果を披露し、将来を嘱望されていたこと、一九四一年に急逝したことを知る同志社関係者は今となっては一部の人ではないだろうか。彼のプロへの道程はいままで音楽文化研究の世界に於てもなぜか取り上げられることが皆無にちかかった。本研究ではその道程を詳らかに描く作業で、太田黒が京都・欧州という空間で、西洋芸術文化をどのように理解し、京都そして帰国後東京で体現していたかを追うことは、換言すれば戦前の日本におけるフランス歌曲の受容とその定着の様相を描くことに繋がると、筆者は考えている。

ただし大きなテーマのため、多種多様な資料を克明に詳察することが必須であり、順次、執筆を進めて行きたい。その第一回として、本稿第一章では、未知なる彼の全体像をその追悼文を通して紹介し、そして、第二章では同志社卒業後、彼にとつて未知であるパリの音楽界が彼の目にどの様に映ったか、さらに恩師パンゼラとの交流の様子、第三章ではパリの地に身を置いたことに依り自分の身体に眠っていたものへの気づき、SPレコード国内盤には含まれていない海外版の歌者への太田黒の評価について考察する。調査対象資料は、日本の一般聴衆がどのような情報を得ることができていたかという観点から、本稿では国内で刊行された音楽関係の定期刊行物に太田黒自身が寄稿したエッセイや論考を中心に考察する。

第一章 太田黒養二の人生の歩み―早逝した太田黒への追悼文を基に―

いきなり太田黒養二の終焉のシーンを取り上げる理由は、現時点では彼の遺品の所在が定かではないからである。日本の近代音楽史を研究するものが、かならず一度は訪問・調査する明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館には、近代音楽史を彩った音楽家や研究者の重要なコレクションが収められている。膨大な第一次資料の楽譜・草稿、定期刊行物、演奏会プログラム、音像資料の宝庫である。筆者も大学生の頃から通い続けている。当然、太田黒養二の第一次資料の行方を知るためにも探索に向いたが、残念ながら遺品は収められていなかった。もちろん、本稿でも参照・考察する定期刊行物の閲覧・複写には多くのご協力を得ることができた。そこで看守したのが唐端勝による太田黒養二への追悼文である。この文章には太田黒の歩みが描かれており、本研究や本稿で言及する資料を理解する上でも有益な記述であるので、以下全文転記しておく(唐端 一九四一)。

【資料①】 唐端勝の太田黒追悼文

故太田黒養二氏を悼む

唐端勝

敗血症とは何といふ病氣であらうか。數日にして人名を奪ひ去る。幽明境を異にして然る後、その敗血症なりしを知るとは、何と言ふ甲斐なきことであらうか。

太田黒養二氏、六月二十三日午前三時三十分敗血症のため急逝せらる。その六日前の十八日日本青年館の廊下で久し振りに會つたばかりである。シュナイダー女史のチェンバロ演奏會であつた。古代舞曲のサラバンドなんかやつぱりチェンバロで聴くと何とも言へん、と關西辨交りで感心してゐたその顔は、別に疲れてゐる風にも見えなかつた。あとで聞けばこの春以來健康が勝れぬ有様だつたそうであるが、しばらく振りで會つた目には何の異常も見當らなかつた。又夏にでも遊びにいらつしやいと、ベルの音とともに扉のところ別れたのがこの世の別れとなつてしまつた。思ひ返せば、會の途中で歸つて行つた太田黒氏はやはりあの日も疲れてゐたのだらうか。

私は京都の同志社で知り合ひになつた。かれこれ十六七年にならう。その當時同志社は京都の音楽學校などとからかはれてゐた程音楽の盛んなところであつた。太田黒氏はマンドリン・クラブのMEMBERとしてステージに上り、華やかな學生生活を送つてゐたが、同時に同志社の男聲合唱團プリムローズ・クラブに籍を置いて、學生音楽の水準を抜いたテナーとして重きをなすに至つた。その頃照井詠三氏に學んでゐたのである。あの頃は關西の學生音楽としても黄金期にあつたのではなからうかと思ふ。「養ちゃん」こと太田黒養二の名はなかなか通つたものであつた。同志社を出て電車會社に入社、電車の運轉を稽古させられたりしてゐたが、歌の道忘し難く、この一途を行くべく渡佛パンゼラに師事したのである。

フランス滞在期間は決して永いとは言へなかつたが、この間の太田黒氏の緊張は前後無類であつた様である。暑中の休みにでもパンゼラの避暑先へまで出かけて行つて教を乞ふといふ有様であつた。その頃のこと
は歸朝後もしきりと聞いたことがあつた。パンゼラも東洋から來たこの熱心な弟子をよく導いてくれたやうである。

歸朝後東京へ出て來て、フランス歌謡で以てデビューすることになつた。昭和七年四月廿三日のことだが、われわれ同志社の學生音樂團に關係のあつたものは大いに力を入れた。今日でもフランスの歌などはそれ程普及したとは言へないがその頃は一層耳慣れぬものであつた。その日のプログラムはリュリの「シシリアン」、メユールの「埃及に於けるジヨセフ」より「レシタティヴとアリア」、グノーの「たそがれ」、フランスの「夜曲」、デュパルクの「前生」「悲しき歌」「航海への誘ひ」、フォーレの「リディア」「マンドリーヌ」「月光」、ペレズの「少女」、ラヴェルの「猶太の祈禱」、カントループの「プーレーの踊り」、ラローの「イスの王」より「曉の歌」、ラポーの「カイロの靴直しマルーフ」より「隊商」その他であつた。

太田黒氏獨唱によつてフランスの歌のよさを随分と知らされたのであるが、それにもまして得るところの多かつたのは遊びに行つたときであつた。ピアノの弾き語りの意氣で歌つてくれるデュパルクやフォーレ。あとにもさきにもあれほどしみじみと音樂を腹一杯に吸ひこんだことはなかつた。私一人で聽いてしまふのが惜しいと、何度も思ひ思ひして聽いてゐた。太田黒氏は學生時代から歌の虫とあだ名されてゐたものだが、虫と人が言ひ出す程でなければあれ程まで、物にすることは出来なかつたらうと改めて感心したりしたものである。

デビュー以來太田黒氏は豊かな聲量とパンゼラ譲りの腕を以て樂壇に乗り出して行つた。佐藤美子、高木

東六、鈴木聰の諸氏とコンセル・ルージュを組織して日本橋の白木屋ホールで発表會を開いたこと、新響の定期や放送、等で活躍してゐたこと、それからゴルフがうまくハンディ四といふすばらしい腕前を持つてゐたこと、何れも有名なことである。最近は釣に凝つてゐたやうである。ゴルフ打球のアタックも聲樂のアタックと同じこつであることを目黒から銀座まで聞かされた、このこつで魚を釣つてゐたのだらうに。

(六月二十四日告別式より歸りて、梅雨晴れの頓に暑氣堪え難き日なり)

【出典…唐端 一九四二】「唐端、太田黒の原稿との照合が行えないため、本稿では資料①から⑦の各引用は原則原文の通りとする」【波線は本稿筆者が附記】

右記の追悼文を一読した時、なんとということなのだろう。現在であれば助かっていたのではないか。あの帰国直後の穏やかで優しい表情は、唐端勝が拝顔したときには消えていたのだろうか。と色々なことが頭の中を巡つた。と同時に、太田黒養二の人生がこの追悼文の中に集約されており、調査者としては彼の足跡の「点」が「線」になつた瞬間でもあつた。

その内容について注目すべきフレーズもあり、少し振り返っておきたい。

「私は京都の同志社で知り合ひになつた。かれこれ十六七年にならう。その當時は同志社は京都の音楽學校などからかはれてゐた程音楽の盛んなところであつた」。この文章より、唐端と太田黒は同志社で知り合つてゐたことがわかる。ただし唐端も一九四三年に他界しており、野村光一の追悼文によると、「唐端は慶応義塾大
学獨文科の三年の時に野村の西洋音楽史の受講生であつたこと、また、卒業後『月刊樂譜』の編集の職についたこと、親族は、夫人以外関東にはいなかった」ことが述べられている(野村 一九四三年)。従つて唐端が同志

社での活動に関与していた内側の人物か、あるいは外部の人物かは現時点では不明である。

太田黒の追悼文の後半、「同志社が京都の音楽學校などと……」は、筆者が本稿「はじめに」で言及したように戦前から京都楽壇の振興ぶりが、関東の人々にも伝わっていたことが分る。

次に引用文後半の波線部分からは、唐端がオンリーワンのライブ視聴者の恩恵を得て、太田黒の歌唱のすばらしさに感動していた様子が垣間見えた。後半の学生時代から「歌の虫」というあだ名がつけられるほど、熱心に声楽をまなび、そのテクニクも表現力をものできたという評価は、まさに本稿以下の彼の歌者またフランス音楽文化の理解・研究に邁進していたことに対する貴重な証言である。

京都時代、パリ時代、東京時代を一貫して太田黒を観察してきた唐端の存在は音楽執筆者の関係を越えた交遊が展開されていたが故、唐端は、短命であったものの充実した人生を送った大田黒の人物像をコンパクトに的確に描くことができたのであろう。

では、次章では、太田黒そしてパリの師匠パンゼラから日本の師匠照井に宛てた書簡を取り上げ、パリで学び始めた頃の太田黒のパリ初体験を眺めてみる。

第二章 一九三〇年フランスでのまなび

第二節 パンゼラからみた太田黒養二の印象

太田黒養二は一九三〇年五月に船でフランスに着き、迎えに来てくれたパンゼラ (Charles Panzera 一八九六ジュネーヴ生、一九七六パリ没) とともにパリに入っているが、ここで取り上げる手紙はそのパンゼラが日本の

師匠照井に彼の印象と勉強ぶりを伝えるものである。

【資料②】 パンゼラ氏から照井栄三あての書簡

パンゼラ氏よりの手紙

親愛なる照井君

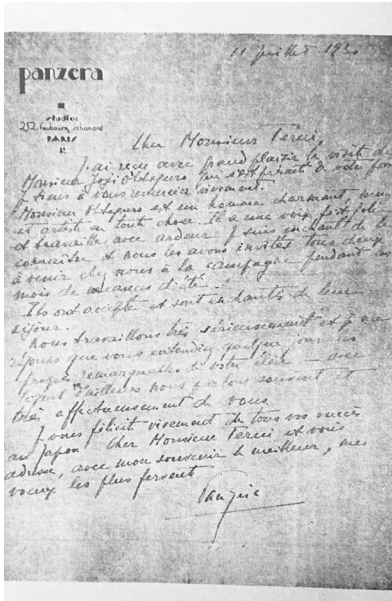
貴君の紹介で太田黒養二君の訪問を受けて非常に愉快でした。

君の御厚意を感謝します。太田黒君は愛すべき人で、音楽的で且つ藝術的な人です。同君は仲々よい聲で勉強も熱心です。同君と知り合ひになつて非常に嬉れしいので、この夏の休暇中、田舎にある小生の別荘に同君夫妻をお招きした處、御兩人は早速應じられて、ご滞在を非常に喜ばれてをります。

われ／＼は一生懸命稽古を勵んで、同君の進歩の跡に近い將來に於て貴君に聞いていたゞくことを楽しみにして居ります。

——君の生徒の進歩は全くすばらしいものです。同君とは屢々貴君の懐しい噂をしています。照井君、小生は貴君の日本に於ける活躍を祝福してゐます。

懐しい思ひ出と、君に對する厚意とを以てこの手



紙をお送りする次第です。

一九三〇年七月十一日

パンゼラ

【出典…パンゼラ 一九三〇】【訳者名記載無し】

パンゼラは太田黒養二に好印象を抱いていた。この手紙の前後に、太田黒養二から照井栄三に宛てた二通のたよりが、『音楽新潮』に掲載されている。

第二節 太田黒養二のパンゼラとの出会いとその印象

【資料③】 パリからの太田黒の第一便

巴里の太田黒養二君から

照井君の優秀な門下の一人で關西の樂壇に活躍してゐた太田黒君が今パリに在つて照井君の紹介でパンゼラから聲樂の教授を受けることになつた。照井君宛の左の書簡には巴里に於ける聲樂研究の空氣がよく出てゐるので左に轉載することにした。

——前略——先日から練習を初めましたがか中々むづかしく唯、頭へ入れる稽古だけしてもらつて居ります。でも先生は大變上手だと賞めてくれます半分はお世辭にしろ、はる／＼日本から來たものには希望を與へてくれます。七月四日にパリから西南、汽車で五時間の Bauge (augers の近く) といふ村の Couvent de sacre-cœur の一室をパ氏 (パンゼラのこと) の願ひで借りることになりました。パ氏も近所

に居住されますし充分勉強が出来ますから。そしてパ氏が照井さんに言つてくれと言はれまして私の授業料を「普通三十分百法のところを四十五分百法でよい。そして秋には上手になればパリで何かさしてやる」とのことです。「中略、本稿筆者」宅君(エコオル・ノルマルで勉學中の宅孝二君のこと)は七月十日まで試験が續きますから一生懸命勉強して居ります。

音樂會の季も去りましたからパリは淋しいものです。たゞロシアオペラとアルヘンチナの踊りが少し活氣をつけ、特殊の人にコルトロオの連續演奏會が噂されて居ります。サン・ヂエルマン・アン・レエ(ドビュッスイの生地)の森へは、まだ行きませんがボアの色特にバガデルの園、ヴェルサイユの森、トリニテの草の色、何を見ても心はドビュッスイ、フォーレエへ飛んでゆきます。Baugeには川があります。パ氏はボートを持つて居られるさうです。泳と釣とが先生と私の休暇を慰めてくれると言つて居られます。パ氏はパテベビイがあります。私も十六ミリの活動があります。普通の寫眞に二人で寫つてテル井さんに送りたいとパ氏は言つてられました。

照井先生

養二

【出典…太田黒 一九三〇年八月】

現代でも海外でのまなびはじめは、なにもかも新鮮で感動の毎日を通すケースが多いが、当時の留学生は、事前に日本に居る時に、動く映像を通して現地をみることはまれであり、写真や文字の世界から想像するしかできなかつた人々にとっては、このような文体で日本の先生に心の内を届けたいという思いが溢れ出てくるのは当

然だろう。憧れのフランスでのパンゼラと出会い、その師に連れられて夏季休暇ではなく、避暑地においても好待遇でレッスンを受けることができるのは太田黒にとつては最高のシーンであり、またそのような過ごし方を提案したパンゼラの太田黒への期待度の高さが伺える。

次便では太田黒は、次のような文面をしたためている。

【資料④】 パリからの太田黒の第二便

巴里の太田黒養二君から

暫らく稽古に夢中になつて居りましたのでつい御無音に打過ぎました。

フランスへまゐりましてから既に三ヶ月はや九月も上旬を過ぎしてしまひました。昨夜は満月、ヴェルレエヌを泣かしシヨパンを歌はしめたあの美しい月を森に圍まれたシャトーの上に見ました。パンゼラは御承知の様にフオレエの月をまたなく愛して居ります。

この秋のセエゾンにはパンゼラは最初スキスで「ペレ・アス」スペインで「フオーストの責罰」、モナコでも「フオーストの責罰」以上確定でドイツ及び英國でもペレアスを交渉中です。

隔日の稽古で大變益します。パンゼラの發聲は充分その深さが理解出來ましたけれど、彼れのコントロオルの技の素破らしさには今更古を卷きます。先日 *La voix de son maître* から發賣された彼のドビュッスイの *Le Promenoir des deux amants* のうちから撰唱するパンゼラの *La grotte* (洞窟) と *Je tremble en voyant ton visage* (汝がおもて眺めつゝ、われ歡喜にふるふ) はまた申分のない出氣榮えです。前者の *Fleur vermeil* の處と後者の *nauffrage* と *fait moi boir* の處は實際世界一でせう。喰はず嫌ひの多くの人々に一度

聞かしたいと思ひます。

私の練習も少しづつ、やつてまゐりましたが日一日と曲數も増して來ました。此の秋にバリで二曲放送いたします。多分先生と一緒にやる事と存じます。歌に全精力を用ゐて居りますので言葉の方面は來た時と同じ事です。然し耳馴れた事は事實で向ふの言事はよく解るやうになりました。

同封の寫眞は暇を見ては、よく泳ぎや釣りに出かける川です。この川もドビュッスイの *Petite suite* の中の「輕舟にて」を思ひうかべさせる川です。では御健在で

照井 先生

養二



ボオジエに避暑中のバンセラ氏と太田黒君

【出典…太田黒 一九三〇年十一月】

この二人のスナップは、第一便(資料③)の太田黒の手紙の文末に「普通の寫眞二人で寫つてテル井さんに



【出典…『月刊楽譜』二二卷三号、グラフセクション】

同志社大学音楽部活動からプロの音楽家への道程―太田黒養二に焦点を当てて(二)―



【出典…『月刊楽譜』二二卷六号、口絵】



送りたいとパ氏は言つてられました」というくだりがあり、おそらくその写真と思われる。

前頁に掲載している写真上右側は日本の師、照井栄三(詠三)、左上は帰朝直後の太田黒養二、下は筆者「むすびにかえて」で言及する一九三二年四月二十四日東京日本青年館でのデビューリサイタル舞台後ろからのスナップである。

また前述のように、太田黒は十六ミリ活動映写機を所持しているのとべているので、フランス滞在中の様子をフィルムに残していると思われる。やはり彼の遺品の所在調査も必須だと痛感する。戦前には太田黒だけでなく、ライブパフォーマンズに関わる芸術家は十六ミリ撮影を行っているケースがあるが、なかなか次世代に継承されないことも多い。もし本稿の読者で太田黒の遺品について情報があるかたは一報いただけたらと切に願うものがある。

次章では、太田黒が帰国直後、パリの回想。そして自身も収集しているSPレコードにどのような歌者が吹き込みを行っているかについての報告を見ていく。

第三章 太田黒養二の帰国後に執筆したパリ観察記にみる欧州の音楽家像

第一節 演奏の志向が留学前と異なったことに気づいた太田黒

「本場においてライブを楽しむ」という思いも強かったであろうが、実際の音楽会のステージに立つ歌者達の歌唱と会場の雰囲気気をそがれてしまった様子が、このエッセイには綴られている。

【資料⑤】 パリのコンサート会場で想定外の思いが浮上

パリ雑話

太田黒養二

太田黒養二は京都同志社を出た人で、在學中は菅原明朗氏に師事して音楽を勉強して居たが、一昨年渡佛し、大テナーのパンツエラに就いて聲樂を勉強し、昨年の暮に歸朝した人、次は氏の談話です。

フランスへ行く前には、「向ふへ行つたら新しいものをうんと勉強して來やう」と思つたのですが、向ふへ行くと、いつのまにかさう云ふ覺悟も決心も、結局消え去つてしまつて矢張りバッハ、ベートーヴェン、フォーレ、ブラームス等のクラシツクな歌ばかりを一心に勉強して來ました。

あちらとても新しいものが全然迎へられてゐないわけではありません。しかし今日までも残つてゐる古い歌曲の中には私がそれまでに味はつた事のない深い良さ、單によさと云つてしまふにはあまりに形容の強味がありませんが、ともかく私共の心を打つ良さが、どうしても私をクラシツクの中に引ずり込まずには置けませんでした。

例へばオペラではラモーの「カストール・エ・ボツクス」(サン・サーンスが編曲したもの)をフィリップ・ゴーベルが棒を振つて演出したものなどは實にいゝと思ひました。



それから、樂壇の或る雰圍氣が知らず／＼クラシツクに親しみを持たせるやうにしてしまひます。例へば、私の師パンツエラの夫人はそのおぢいさんがベートーヴェンと親交のあつた人、等と云ふ風に樂壇人の祖先と云ふのがそれ／＼クラシツクの血を受け繼いで居ると云ふ有様です。

◇
日本に居て知る、あちらの樂人の人氣と本場での人氣とが大變異つて居るのに驚きました。

ジューリー、スキーパー、ダルモンテ等と云へば世界一流の藝術家として尊敬されてゐますが、私はこれ等の人の獨唱會に行つて驚いた事は、歌者がステージに上ると聽衆がヤンヤとわめき騒ぐ事でした。

勿論、廣い會場は満員で立錐の餘地もないと云ふ盛會さです。しかし、パリイではかう云ふ風に演奏者に向つてわめきたてたりするのは、本格的な藝術家に向つてすべき儀禮ではない事になつて居ます。聽衆の一人が「今度は何々を歌つてくれ」と怒鳴ると「オー・ケー」とばかり、プロを變更してその注文された歌を歌ひ出します。日本等では淺草的な事です。

そこへ行くと、ボル・ドンだとかパンツエラ、それからクロアザ、バトリイ、ニノン・ balan 等の音樂會は落ついて居て氣品があつて、實に氣持ちのよいものです。

尤も前者の様に一流藝術家としてでなく大衆藝術家の演奏會場は廣大なもので、それがすべてはち切れる様に満員になるのですが、後者、つまり純藝術家の音樂會と云ふのは六七百人位入る小さい會場で之も満員になります。しかしその満員の程度が違ふと同様に客種も全然違ひます。

後者の音樂會では勿論一人として怒鳴る者はなく、聽衆はすべて靜かに聽き入つて居ます。日本でも外國でも同様に、本とうの藝術的な音樂會と云ふのは客が極く少數で、しかも聽きに來る人は大體極つて居ます。眞の音樂藝術愛好家とか或は作曲家音樂家等がすべて集つて來ます。そして良い音樂會程、その會の氣分が良くて、本統に音樂を味はつてゐると云ふ氣持がします。

◇

私がパンツエラに習つて居る時に「レコードに入れる時には、このところはこんなに歌ふのだよ」と時々教へられました。レコードの吹込に就いてかうした一流藝術家が十分の關心を拂つて居る事はレコード・ファン諸氏も敬意を表して、事だと思ひます、但し人によるとレコードで聴くのと本物をきくのとでは大變に違ふ事があります。例へばクロアザの様に、レコードによつてはあの氣分と持味が可成りそがれてゐます、實際にあの人の聲をきいた人はレコードでは失望する事です。

◇
一體にあちらの樂人達はレコードに就いて非常に注意して居ます。樂人の誰でもが精巧な蓄音器を持つて居て、自分の入れたレコードは勿論の事、名ある人のレコードはどん／＼買ひ込んで解釋の仕方とか、歌ひ方等を盛んに研究してゐます。

◇
パリでよく演奏するピアニストではコルトー、イーヴ・ナット、ルビンシュタイン、シアンピ、女流のマルグリット・ロン等は一流藝術家として洋琴界の王座を占めて居ます。それにセロのパプロ・カザールスは日本でも物凄い人氣があると同様にパリでも無倒的に凄い人氣があります。しかしこの人氣は茲にも云つた大衆的人氣とは違つたものである事勿論です。

◇
私がパリに滞在中、あちらで賣り出された藝術的な歌曲レコードは大部分持つて來ました。日本でも未發賣のものが相當にありますから、次號あたりにそれ等のレコード・レビューを試みて見ませう。

【出典…太田黒養二「パリ雑話」一九三三年三月】【波線は本稿筆者が附記】【原文のルビ省略】

【資料⑤】の冒頭二段落のくだりは、彼の音楽志向が古典、ロック音楽へと回帰したと振り返っている。二段落ではパンゼラ夫人の祖父がベートーヴェンと親交のあった人物と接点があったと言っている。西洋芸術音楽の遺産が脈脈と流れている事への憧憬とともに、太田黒の古楽への回帰は、やはり同志社大学時代からパリに旅立つまでの十年近い日々、「マンドリン音楽」に接し、もちろん日本人の新作や同時代の作品も演奏していたが、自らもマンドリンを奏する音楽環境にあったことも影響しているのではないだろうか。

それに続き後半では、日本でイメージしていたライブ会場の歌者のパフォーマンズぶりに驚く一方、パンゼラ、そして前述の、クロワザ、さらにバトリなどの声は心に染み入ると述べている。現在でも名歌手として多くのファンがいる歌者であるが、歌うという行為だけでなく、真摯に作品と対峙する姿勢が、太田黒の心に分け入ってきたのだろうと思われる。荻野綾子（一八九八生、一九四四年没）も師クロワザ（Claire Croiza、一八九八生―一九四五没）の謙虚で真摯に音楽に向き合う姿勢を心から尊敬し、三回渡仏しレッスンを受け、日本ではクロワザの姿を鑑にして演奏、教授活動を行っている（仲 二〇一九）。

パンゼラよりレコード吹込みに際し慎重な姿勢で「録音」ということの意味合いを示唆された事は、対面で演奏空間を共有するのではなく、自身の「声」を残すことはパフォーマーにとっては後世においても不特定多数のレコードファンからも評価される可能性があることを含めて、録音の行為の重みを知ることになったのではないだろうか。

末尾では、やはり日本へ来日、その後来日することになる器楽奏者の演奏も聴取し、太田黒は全身でその音の響きを吸収していたようにみえる。

第二節 レコードに吹込まれた歌曲・その歌者への太田黒養二の評価

現代でもフランス歌曲の演奏会が開かれることはイタリアンソングやドイツリートに比べると少ない。ましてや、当時は照井や太田黒以外にはごくわずかであり、筆者が太田黒研究と並行して研究対象としている荻野綾子（前節参照）など、本人たちなど限られた歌者だけであった。従って、帰国すると生の声を通してフランス歌曲を聴取することは難しく、渡欧した歌者は積極的にS Pレコードや楽譜の収集活動をすることは必須の行為であった。

【資料⑥】 太田黒養二のレコード視聴談

聲樂デイスク

テノール 太田黒養二

デイスクを集め初めてから十二年になりました。私の聲樂研究も此處に源を發して居ります。忘れもしませんが一等初めにビクターの二百五十圓の機械をジリーの吹込んだ歌劇の「イスの王」の曉の唄とガリケルの歌劇「ラクメ」の鐘の唄とを買ひ込んだのです。其後聲樂の研究と共に色々と方々を漁り出し歌のデイスクだけで今日迄多分四百枚程もあるでせう。數へてみたわけではありませんが。その中でも私の専門のフランスものに就いて少々書かして頂きます。尤も讀者諸氏も各方面にある事と存じますから私の感じたドイツ語イタリア語ロシア語等のデイスクに就いても後で一言し度いと思ひます。

元來日本ではフランスものはあまり出て居りませんし、フランス聲樂を研究して居られる人も至つて少數の事ですからあまり諸氏の興味をそゝる事にはならないでせうが映畫と歩調を合して健全な運動を初めたフランスのデイスクに就いて少しの御參考にはなるだらうと思ひます。

私は教を受けた關係上矢張りフランス男性デイスク藝術家としての最高の地位にバリトンのパンゼラ氏を置き度いと思ひます。彼は稀に見る藝術家です。それで居てフランスビクターの吹込曲數から言つても最も多數です。約六十枚程發賣されてゐる筈です。その中最もよく入つて居るのは彼自身の言に従へばドビュツシーの「二人の愛人の散歩」中の二曲です。去年の十月末に發賣されたベリオオズの「ラ・ダムナシオン・ドウ・フォースト」の中で彼はメフキストを歌つて居りますがその中でも「薔薇の唄」と「セレナード」とは絶品だと有名なトリスタン・クリンゾールは批評して居りますこのデイスクは十枚一組で指揮はコツポラ管絃樂はバドルー、コーラスはサン・ジェルヴエ、獨唱者としてはオペラ女優のブレトンがマルゲリート、フォーストは同じオペラのテノールのトレヴィイです。レコーディングもビクターとしては大出來で、雜音も從來のと比較にならぬ程尠くなり近來の傑作と信じます。日本でもプレスしたらいいと思ひます。米國からも何千組と注文が來たと言つてパンゼラは上機嫌で居りました。

聲樂家としてデイスクに吹込む場合一番大切な事は發音の明瞭と言ふ事です。彼が如何にデイスク藝術と言ふものに研究を積んで居るかと言ふ事は前述のデイスを聴けばすぐ解る事と思ひますが外の獨唱者に比して斷然明瞭な發音を聴く事が出來ます。ドイツ或はフランスの聲樂曲がイタリアのベルカントと異なる所以はその内容の表現にあります。従つて此等の歌曲を歌ふ場合は特に發音に留意して詩の奏味をよく聴衆に理解させる事が必要です。此の意味で彼は藝術的歌謠を最も良くデイスクに記録した事となります。こんな歌曲はもとゞり旋律には大した重要性を持たせず言葉そのもの、アクサンをよく生かしたものですから發音をあいまいに歌はれたらその曲の藝術的價値は消滅してしまふ事と思ひます。

日本に歸つてビクターから、彼のペレアスが發賣されてゐる事を知りまして大變嬉しく思つて居ります。

然し彼はあの曲は出来築として良くないと申しましたからあの盤を以て彼の藝術を云々するわけには行きません。彼は私がパリを立ちます少し前にデユパルクの歌謡曲を五ツ六ツ吹込みました。歸朝後の彼の手紙によれば五月に發賣されると申して來て居りますからパリでは既に出て居る事でせう。私も早速出たら送る様に彼に願つておきましたから日ならずして送つてくる事と思ひます。以前にも彼の同じ曲が出て居たのですが今度のは尙一層深みを増した彼の藝術を記録してある事と思ひます。日本のビクターは、用心深くてこんな曲を出さぬのが残念です。コロンビアからはどしどしフランスものが出て居りますけれど、一寸パンゼラに就いて一言して置きます。彼はパリのコルトーのエコールノルマル音樂學校に教鞭を採り、プレイエルにステュディオを有し個人教授をして居ります。またパリ國立音樂院の聲樂部の卒業コンクールにはその審査員として擧げられて居る人です。オネツガーやラヴェル等は彼の親友で、御承知のカザルスとはよく二人で方々を演奏旅行して居ります。

オペラ座付きのテノール歌者にジオルジュチルと言ふ人があります。コロンビア專屬で堂々たる聲を有して所謂名歌曲を四五十曲を吹込んで居ります。私の好きな一人です。ニノン・ヴァランと一所にマスネーのウエルテル全曲を歌つてコロンビアから出しました。曲もパリでは有名だし、藝術家の顔ぶれもよく揃つて居りますのでパリでは評判でした。チルのレコードで私の秘藏とするものはセザール・フランクの「第四アティテユード」です。聲樂の樂徒として學ぶ可き多くのものが、記録されて居ります。

この外に僅か一枚より吹込まなかつた天才カゼット（三十二三歳で逝つた人）のその一枚をパンゼラに教へて頂いて買ったのがあります。これこそ秘藏中の秘藏です。曲はマスネーの歌劇「グリゼリデイス」中のアレンの歌で「我は小鳥なり」と言ふのです。フランスビクターです。普通にマスネーの曲で一番美しいと

されてゐる「エレジー」だとか「マノン」の中の夢の唄にも優る甘美な名曲で、天才カゼットはその美聲と藝術的才能を遺憾なくこのディスクの中に示して居ります。これだけ柔かい聲の持主は現在の誰にも見出し得られません。彼はオペラコミック座の歌者でしたが一寸した手の傷が元で二三日目に死んだのです惜い事だと思ひます。確二三年前の事です。

パリで女性ディスク藝術家として一番有名なのはニノン・ヴァランでせう。聲の色から私はメゾソプラノだと思ひます。堂々たる體驅で中々實のある歌ひ方です。ステージ藝術家としても第一流です。ワグラムの通りに私塾を開いて居ります。個性的な聲でデイクシオンも立派でデイクスの中でも歌詞がよく聞きとれます。私の持つてるもの、中でもドビュツシーの「グリーン」「操り人形」「マンドリーヌ」等はい、方です。

マダム・クロアザは藝術的に天才です。彼女の音楽會では聴衆は皆彼女の歌ひ出る曲の中に魂の存在を忘れて恍惚として居ます。然しその呼吸の缺陷とデイクシオンが聲樂的ならざる爲に一度ディスクに吹込んだものを聞くと大變失望されます。日本でもコロンビアから出て居りますが、デュパルクの「悲しき歌」等をよくお聞きになればわかる事と思ひます。私の持ち歸りましたものでは私はオネツガー自身で伴奏した彼の作品の「秋」と言ふのがい、様に思はれます。彼女は前にも申しました様に大藝術家です。然し大聲樂家とは言ひ兼ねます尤も相當の年輩に達して居るので幾分聲を失くして居ると言ふハンデイヤツプもある事でせう。とまれ日本のディスクファンに一度彼女のナマの歌をお聴かせし度いと思ひます。彼女は去年の秋佛政府からレジオントナール勳章をもらひました。

マダム・バトリのディスクも日本で發賣されて居ります。ラヴェルの「孔雀」等い、でせう。彼女は自分でプレイエルのピアノを奏し乍ら歌つて居ります。中々學問のあるい、歌ひ手だ相で發聲等に就いての著書

もあります。私のパリ滞在中には不幸にして彼女の會は開かれませんでしたから大した事は此處に記されませんが彼女が第一流のバリの歌ひ手の一人である事は確でそのディスクは安心して買へると言ふ事を申し上げ得る次第です。

マダム・マルチネリと言ふソプラノがあります。實によく肥つた身體ですがそれに似合はず所謂玉を轉がす様な美聲です。一時は佐藤美子さんはこの人に教へを受けて居られました。ディスクにはあまり多く吹込んで居りませんが、ベルリオーズの「ダムナツオン・ド・フォースト」中のマルゲリートの歌ふ「ゴチークの歌」と「ローマンス」をヴオルフ指揮のオルケストラ伴奏でポリドールに吹込んだのがありますが大變立派なものです。至極柔らかであり且ドラマティックでもあります。

以上フランスものに就いて記しましたが、どのディスクも皆特殊のフランス歌謡曲ですから中々手に入り難いと思ひますが特に注文したいと思はれる人は英語でバリのデューランあたりに注文なさればすぐ送つて來ます。代金等後でい、だらうと思ひます。

次にその他の國々の人が入れた日本で買へるレコードですが、現在最高の歌者たるシリアピンの「ボリス・ゴドノフ」と「ドンキョット」とは逸品でせう。シリアピンは六尺以上の藝術的にも肉體的にも所謂巨人です。私はシャンゼリーゼー場所のオルケストル席最前列で彼のボリス・ゴドノフの神技に接しました。彼は幾世紀に一人と言ふ、或は幾十世紀に一人と言ふ程の大藝術的聲樂家であると信じます。

亡くなつたカルーゾが歌つてゐるドニゼッテ作曲の「ラ・ファヴォリタ」の中のロマンツアはベルカントの極致であると思ひます。

ウイーンのソプラノのエリザベト・シューマンがビクターに入れて居ります。シュトラウスの「ステンチ

エン」と「モルゲン」とは誠に良いものです。實にドイツらしさが現はれて居て、私の大好きなもの、一つです。日本のステージで歌はれるドイツの聲楽曲がどれだけ本場のそれと異つてぎこちないものかこのディスクを一度聴けばよく了解出來ます。ドイツの歌は角のあるものと思つて居る人がありますがこの人々には非一度聴かし度い盤です、

一通り好きな人達に就いて書きましたがまだ中々多くの人々が残つて居ります。いづれ機を見てゆつくりと記して見度いと思ひます。良い音楽會を自由に聴けぬ日本の洋樂ファンにはディスクは缺く可からざるものです。従つてその影響も極めて深く、その趣味等も之に依つて方向を定められる事と思ひますから、よく撰澤された立派な人々の立派な盤に親しまれん事を切に希望する次第です。

〔囲み記事〕

一九三二年度 優秀レコード

フランスの同協會で

フランスでは今春早々から一九三二年度内に發賣された各種レコードの中から、最優秀なるものを審査中であつたが、その一等としてパンゼラの吹込んだ「ファウストの却罰」が選ばれ直ちに決定した。

(この報はパンゼラより太田黒養二氏のもとに入つたものである)

【出典…太田黒養二 一九三二「音楽ディスク」】〔波線は本稿筆者が附記〕【原文のルビ省略】

以上相当長い論述であるが、執筆日時が記されていないので、どの時期に執筆したかはわからない。しかし、帰国直後、デビュリーサイトを控えていた時期に、第一級の音楽家によるレコード盤の紹介と評価の作業は時

間を要したであろう。十年を超えるレコード収集を通して多様な国の歌者の「歌声」を聴き込み咀嚼し、ヨーロッパの地でライブでも視聴した体験に照らしながら、クラシック音楽愛好家にむけた解りやすい表現をとりながら、フランス歌曲等の神髄を聴いてもらいたいという太田黒の熱意が伝わってくる。

またクロワザの現況を的確に忌憚なく評している姿勢は、自身が「歌者」として発声そして欧州各国の言語の発話に苦労したからこそその妥協を許さない執筆態度は好感が持たれる。またパンゼラからの情報よりレアな録音盤についても紹介され、フランス文化愛好家にとって待望の論述であり、且つドイツリートの愛好家やフランス歌曲初心者にとっても多くの情報が満載である。

第四段落冒頭の「聲樂家としてデイスクに吹込む場合一番大切な事は發音の明瞭と言う事です」は今でも重要なポイントである事は言うまでもない。ユーチューブなどの動画で、歌者の表情も含めて聴取することに慣れてきた現代の聴衆には、理解しづらい指摘ではあるが、雑音交じりのSPレコードから詩人や作曲者の思いを享受するには、よほど明確な発音がされていないと皆目見当がつけられない。と同時に太田黒が指摘するように、正確な発音は、原語の解釈を通して詩人の想いを受け止め、歌者と伴奏者がともに共振する演唱を記録に残すという協働を成立させる上でも重要な指摘であることは言うまでもない。太田黒は、パリでパンゼラより隔日にレッスンを受けていた。本章で取り上げた論述は、「ライブ視聴」と「音盤聴取」両方からフランス歌曲に迫り、吸収してきた自分自身が、日本に帰国して、これから本場の真の歌者の演奏を聴ける機会が激減することの寂寥感も見え隠れする。その後、彼は十年余りで他界することになるわけだが、一九三六年来日したシャリアピン(Fredor Chalapin 一八七三—一九三八)のリサイタル会場で、シャンゼリゼでの視聴体験を思い出しながら聴き入っていただろうと思われる。

この論述には、なによりも欧州の地をまだ踏んだことのない日本の音楽ファンに対して、出来るだけ多くの情報を得て、せめてレコードを通してでも「本場」の優れた歌者の表現に触れてほしいという熱い思いが込められているように思う。

結びにかえて

太田黒養二の帰国後の活動は、僅かあしかけ十年足らずに終わっている。本稿にも転載している追悼文にあるように、評者にも想像もできないあっけない終焉であった。

本稿で紹介したこの二篇の原稿執筆後、四月二三日に日本青年館において、日本でのデビューリサイタルの舞台にたっている。千人の聴衆の前での歌唱にどのような評価がなされたのだろうか。本稿では、追悼文を執筆した唐端勝の評文を最後に見ておく。この追悼文に転記されていたプログラムの内容の一端がみられる。

【資料⑦】 デビューリサイタル評文

太田黒養二氏のデビューを聴く

唐端 勝

四月二十三日夜、日本青年館。われ〳〵の同胞からこれだけのテナーが生れたことは非常な誇りであり喜びだ。我國にはテナーが乏しい。特にフランス正統のテクニクを行くテナーを持つてゐなかつた。此處に氏を得たことの絶大な価値がある。

音樂的田舎京都から直ちに渡佛彼地の第一人者パンセラに就いた氏の名は東京樂壇には耳新しい。そして

氏の滞佛期間は比較的短か、つた。だが一日をきにレッスンを取り、パンゼラの避暑にも同行し、又パリ音楽院の學生のために師の代稽古を勤める程パンゼラの信用を得るに至つた太田黒氏の力は名聲を超えて大きなものと言へよう。我々は安心してフランス歌謡の眞髓バ氏のレシタルから汲み得ると確信する。

デビューの日の曲目は氏の力を問ふに申分のない本格的のもので、聴き了えて先づ感ずる事は、テクニクを征服し得てはじめて到達出来る迫力と艶と、こくを以て、歌それごとくが十分妥當に仕上げをされてゐる事だつた。

氏の歌ひ振りには些の虚飾もない。おどかしも媚びも何もない。只あるものは淡々として、しかも聴く人の心に食ひ入つて来る宗教的献身の態度だ。だが逃避的なニヒリスティックなものとは悉く反對だ。吾々は情熱をいぶし深めた、宇宙的な敬虔を感じずる。だから氏の歌ひ振りは人の心を煽りはしない。華やかな、きらびやかな要素は氏には求められない。然し深く／＼掘り下げて行く契機を與へる。氏の歌は池の面に落された一個の石だ。

この泌み込んで来る様な崇高さを最も深く感じたのはフランクの「夜曲」だつた。この「清淨の夜に心の慰安を求め、星夜の微光に苦惱を訴え、聖なる夜に心の平和を希ふ」曲はテクニクの點で非常に六ヶ敷いものだと氏から聞いたが、それをあれ程感銘深く仕上げた氏の力には頭が下る。

グーノの「女神かひとか」には磨かれ切つた爛熟期の艶を感じたし、ペレズの「少女」には思はず頸を襟に埋める様な迫心を感じた。

アンコールに歌つたカントループの「バイレロ」は輕快な誰でも聞けばふと口にしたくなる様なメロデーだ。然し伴奏は可なりぎこちなかつた。當夜の伴奏はリディア・シャピロ夫人だつたが總じて上々の出来と

は言へない。太田黒氏の桎梏となつてゐた様だ。氏の歌にびつたり合致した伴奏者を得れば更によりよく氏の力を示し得よう。

要之、太田黒氏のテクニクは出来てゐる。そして若いテナーとして仕上げも出来てゐる。今後の氏に期待する所は年齢による滋味と艶と力の變化だ。

最後に。氏の藝風――少なくとも現在の――は社會經濟組織が安定して後に來る文化爛熟期に實る種類のもので、かなり高踏的だ。従つて過渡期にある社會に於てはその藝風を生み出す心境の故に、自然相互的に大衆から游離し、次第に心の寺院の中へ沈潜して行く傾向を持つてゐる。氏の年齢に依る藝風の變化に興味を以つ所以だ(國民新聞所載)

【波線は本稿筆者が附記】

【出典…唐端勝 「太田黒養二氏のデヴューを聴く」 一九三二年六月】

このデビューリサイタルの評文は、本稿で概観してきた若き太田黒が京都で学び、東京を経由せず、ダイレクタにパリに飛び込み、そこで学び得たもの、感得したものを、東京の聴衆に静々と披露した様子が描きだされている。同時に十年後を待たず、燻した輝きと、「渋味」の片鱗が見え隠れする歌唱であつたことが想像できる。現段階では唐端が明確に京都、関西人とは断定できないものの、太田黒側に立つた評文であり、次稿では、彼にとつての関西ともパリとも異なる東京の聴衆にどのような評価を受けていったのかについて比較考察する。

そして、太田黒は既にこのデビューリサイタル前後より、「フォーレ」「ドビュッシー」等についても長文の論述を音楽雑誌等に寄稿している。当然のことであるが、研究者や評論家、雑誌記者、詩人が多くの著述活動を展

開している「東京」の中にあつて、歌者としてのどのような視点でフランス歌曲の解釈を示したのか、また師の照井栄三の論述とも比較しながら整理、考察する。また楽曲の解釈だけでなく、歌者の立場から発声法をどのように考えていたかも併せて考察する。

彼は同志社でフランス語を第二外国語として学び、フランス語の響きに関心を持つと同時にフランス歌曲を修得する道を歩みはじめ、一方ではプリムローズに所属して男声合唱の響きにも魅了されていたのではないかと思う。そして同時にマンドリンの演奏活動を通じて出会った、菅原明朗から何を学び取ったかについても、マンドリンクラブの演奏会プログラムをベースに跡付けていきたい。

現時点では太田黒が基督教徒であつたかどうかは不明だが、唐端が感得した太田黒の信仰心の有無についても探らねばならない。同志社では神学部ではなく法学部経済学科で学んでいたからこそ、讚美歌だけをレパートリーとする男声合唱ではなく新たに創立された男声合唱団プリムローズを活動の場とした。しかし、西洋芸術音楽の伝統の世界では基督教音楽ともいやおうもなく対峙しなければならないことを、もしかすると欧州の作曲家や演奏者との交流を通して自覚するようになっていったのかもしれない。

課題満載の研究であるが、彼の足跡を分析、考察しつつ、過去の人物の再評価を通して現代のプロの音楽家に供する成果を見出すことにつなげることができればとも思う。

同時に、現在、同志社大学を含め全国の大学で音楽活動を行っているアマチュアの若人にも益することがないかどうかにも注意深く資料を読み込んでいく作業を通して、おこがましいかもしれないが短命であつた太田黒養二に代つてメッセージを発することができるとも思うのではとも思う。

【主要参考文献】

- 赤井悟編集代表『同志社大学マンドリンクラブ百年史』(南三学出版、二〇一〇年)
- 石川芳次郎『同志社五十年史』(カニヤ書店、一九三〇年)
- 太田黒養二「巴里の太田黒養二君から」『音楽新潮』(十字屋楽器店、一九三〇年)七巻八号、二二頁。
- 太田黒養二「巴里の太田黒養二君から」『音楽新潮』(十字屋楽器店、一九三〇年)七巻十一号、一七頁。
- 太田黒養二「パリ雑誌」『レコード』(音楽世界社、一九三二年)三巻三号、四六―四七頁。
- 太田黒養二「声楽ディスク」『レコード』(音楽世界社、一九三二年)三巻六号、四二―四五頁。
- 唐端勝「太田黒養二氏のデヴューを聴く」『月間楽譜』(山野楽器店、一九三二年)二巻六号、九八―九九頁。
- 唐端勝「故太田黒養二氏を悼む」『月間楽譜』(山野楽器店、一九四一年)三十巻七号、八六―八七頁。
- 京都音楽協会『京都音楽史』(京都音楽協会、一九四二年)
- 仲万美子「明治後期の女学生による洋楽／邦楽のあり方とその発表の「場」とは——同志社女学校期報」『記事事例に——』『礼拝音楽研究』(キリスト教礼拝音楽学会会誌、二〇一二年)第十一号、三三―五六頁。
- 仲万美子「一九三二年大連での芸術歌曲演奏会について——演奏家のレパートリー、公演ツアーに焦点を当てて」『植民地における近代音楽の帰属意識——東アジアとオーストラリアの芸術歌曲の場合——』(平成二七―三〇年度科学研究費助成金研究成果報告書、基盤研究(C)、課題番号15K02117、代表時田アリソン)(二〇一九年)三一―四六頁。
- 仲万美子「日本近代音楽史における荻野綾子のまなびと諸活動の意義」『音楽表現学』(日本音楽表現学会第一七回大会口頭研究発表要旨、二〇一九年)十七号、二六頁。
- 野村光一「唐端勝氏を追悼す 唐端勝君のこと」『音楽の友』(音楽之友社、一九四三年)三巻七号、二一―二二頁。
- パンゼラ「仏蘭西の大バリトン・パンゼラの筆跡」『音楽新潮』(十字屋楽器店、一九三〇年)七巻十一号、五五―五六頁。
- 松下鈞他共編『マエストロの肖像——菅原明朗評論集』(大空社、一九九八年)
- 山形達夫『同志社グリークラブ創立五〇周年記念誌』(非売品)(同志社グリークラブ、一九五四年)